とある錬鉄の英霊が為す物語

哀鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある錬鉄の英霊が為す物語

【Ｎコード】
Ｎ７２３５Ｚ

【作者名】
哀鈴

【あらすじ】
英霊エミヤは、科学の街、学園都市へと至る。
発達した科学、それによって生じる超能力。そして、元の世界とはちがう在り方をした魔術師たち。
自身の理想の果てに摩耗しきった彼は、この世界で何を為すのか。
科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

というわけで、エミヤｉｎ禁書の世界です。
多作品に比べ、エミヤと禁書のクロスが少ないと思ったので、書いてみました。
初投稿ですので、設定が甘かったり、文章が拙い部分が多々あると思いますが、よろしくお願いします。

剣の丘にて（前書き）

よろしくお願いします。

剣の丘にて

『…呼ばれている。』

無限の剣が乱立する荒れ果てた荒野で、男は自身が今まさに喚び出されようとしていることを悟った。

『しかしこれは…？』

この召喚は、守護者として喚ばれる時とも、聖杯戦争でサーヴァントとして喚ばれる時とも異なる。

いや

そもそも喚ばれるというよりは、道が開く、といった感覚に近い。

『しかし、どうであれ、私がこれに抗うことができないのということに、変わりはない』

男は口端を皮肉気に歪める。

『ならば、せめて、向こうでは精一杯足掻くこととしよう』

そして、光がはじけた。

男は消え、残ったのは荒れ果てた世界だけ。

ただ、世界を覆う朱い歯車が、廻り続けていた。

無限の剣は黙したまま、担い手を待ち続ける。

第1話

学園都市

東京西部に位置し、総面積は、東京都の約3分の1に相当する巨大都市。

都市の周囲は壁に囲まれ、専用ゲートと空路を除き、出入りする方法がなく、外界から隔離されている。

さらに、その高い化学技術と生活水準は、学園都市の内と外では、数十年以上の技術の差が存在しているとまでいわれるほどである。

総人口は２３０万人ほどであり、その８割は学生、それぞれが能力開発をうけている。

能力開発とは、脳を開発して、超能力を発現させることを目的としたものだ。

事実この都市の中では、能力者という存在が、あたりまえに存在してる。

そんな都市内の、とある学区に建つ、窓も、入口さえも存在しないビルの中。

液体に満たされた巨大なビーカーの中に、一人の『人間』が浮かんでいた。

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

最先端の科学技術を持った都市の街の長の視線の先には、一人の男がいた。

年齢は、高校生くらいだろうか。鍛えているのであろう、服の上からでも、全身に程よく筋肉がついていることが窺える。

特徴的なのはその短髪。銅が錆びたような赤い色をしている。

そして、なによりも目につくのは、その瞳であろう。男の年齢には

ふさわしくない、まるで鷹のように鋭い目。
その瞳が、彼が只者でないことを表している。
そして、男が口を開いた。

「さて、アレイスター。これは、どういうことだ？」

「どういうこと、とは？」

「とぼけるな」

男が、アレイスターを射殺さんばかりに睨みつける。
しかし、その目に睨みつけられているのにもかかわらず、その表情はまったく変わらない。

「これのことだ」

男は眉間に皺を浮かべながら、自分の手の中にある赤いコートを指さす。

「なぜ私の聖骸布の外套が、こんなコートになっているんだ…」

男はもともと、ある聖人の聖骸布でつくられた赤い外套を、身にまとっていた。
しかし、それは今現在、現代風のロングコートと化している。

「とはいっても、君のあの外套は、装着が面倒だろう？
だから、少しばかり手を加えてみた。」

「手を加えてみたって…」

男は痛むこめかみを抑える。

たしかに、もともと男が着ていた外套は、上半身と下半身で別れており、少しばかり着るのが面倒であった。
とはいっても、長年身に着けている、何度も自分の命を守ってくれたものである。
勝手に手を加えられて、いい気はしない。

「安心したまえ、学園都市製繊維を使い、性能を変えることなく、さらに防御力をあげることに成功している。」

「…そうか」

「そしてさらには」

「もういい」

これ以上聞くのも面倒だし、そもそも今は夏。そう着る機会もないだろう。
そう思い、男はため息をついた。

そして液体の中に、目を向ける。

「では、私はそろそろ行くとしよう。」

「ああ、行くといい。この街が、君に合うことを願っているよ。」

しばしの沈黙、そして。

「…アレイスター。」

「なんだ？」

男の視線が、より一層鋭くなった。

「貴様が何を企んでいるのかはしらないが…、すべてがうまくいくと思うな。」

「…というと？」

「貴様のいう『計画』に、おそらく私も組み込まれているのだろう。だが、そう簡単に私を利用できるとは、思わないことだな。」

「…心得ておくとしよう。」

ビーカーの中の『人間』は、無表情のままそう答えた。

「では、さらばだ――――『魔術師』アレイスター・クロウリー。」

「ああ、君に幸運を――――衛宮士郎、いや、『英霊』エミヤ。」

こうして、錬鉄の英雄は、学園都市へと至った。

科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

第2話

英霊エミヤが、学園都市に降り立ったのは、数日前のことである。

彼が最初に目にしたのは、数多くの機械だった。
見たこともない技術の使われているさまざまな機械。
そう、『機械』である。
これを見たエミヤは、まずこの事実を訝しんだ。

『機械』とは、一般的に考えて、『科学』と結びつくものである。
しかし、呼び出された自身は、魔術的な存在。
英霊であり、抑止の守護者。

よって、自身を呼び出すためには、魔術的な儀式が必要である。

しかし、この場にはそのようなものはなく、周りに見えるのは、
科学のモノのみ。
果たして自分は、どのような理由でここにいるのか、エミヤがそのような疑問を持つことは当然のことである。

ｓｉｄｅ　ＥＭＩＹＡ

私は、ショックをうけていた。

再び、あたりを見回す。
空中に浮かんだモニター、次から次へと無数の数字を処理し続ける小さな箱のような機械、ランプが点滅を繰りかえす大量のコードにつながれた強大なコンピューター。

少し見るだけでも、ここが、かなり科学技術の発達した場であることがうかがえる。

「（場違いだな…）」

なんてことを呆然としつつ考える。

しかし、なにも自分は、まわりが機械ばかりだからとか、魔術の気配を感じないからといった理由で、ここまでショックをうけているわけではない。

問題は、自分の容姿にあった。

電源のはいっていない暗いモニターに映った、自分の姿をみる。

服装は、普段と同じ。黒のアーマーに、赤い聖骸布の外套を羽織っている。

ここまでは問題ない。

しかし…

「衛宮士郎…だと…」

そう、今の自分の姿は、自分が過去、衛宮士郎であった時の姿なのである。

自分の本来の姿は、白い髪に褐色の肌、身体は２０代後半くらいのものであった。

だが、今現在は、銅が錆びたような色の赤い髪に、日本人らしい肌の色。そしてなにより、高校生くらいの身体だ。

「…なんでさ…」

さらに続けて自分の身体の中身（構造）を、視る（解析する）。

「…」

――自身の能力は、英霊時と変わりはない。
魔術回路は２７本正常稼働しており、魔力量も十分にある。
若干体が縮んだことにより、筋力などが落ちてはいるが、反面、手足が短くなったことで、小回りが利くなどの利点も生じることから、気にする必要はないだろう。

そして、完全に受肉していた。

……だから……なんでさ。

とりあえずこれについては保留した。

自身の状態の確認を終え、一息つく。

それにしても、存在を消したいほど憎んでいるかつての自分の姿になるとは、なんと因果なことか。

そう独白しつつ、とりあえずこの場を離れようとしたところで――

バチンッ

そんな音とともに、周りの機械が一斉に停止した。
それと同時に、切り替わるモニターの映像。

そこに映っていたのは、一人の『人間』だった。

その容姿は、奇妙なことに、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える。

自然、警戒を強める。

そしてそれは声を発した。

「ようこそ、『来訪者』。私の名は、アレイスター・クロウリー。この、学園都市の統括理事長だ。」

その名にひどく驚いたが、それを表情には出さず、私も答える。

「挨拶してくれるのはありがたいのだが、何分私は、状況が把握できてない。
できれば、説明をしてもらうとありがたいのだが。」

「わかっている。だが、そのまえに1つ質問がある。
君は、いったい『何』だ？」
その質問が、名前などを聞いているのではないことを理解する。だが、こちらも簡単に素性を明かすわけにはいかない。
「ただの一般的な人間だが？」
それを聞き、彼――（おそらく男だろう）、アレイスターも言葉を返す。
「それだけの魔力を内包しておいて、よく言う。」
その言葉に、私は内心驚いたが、それを表情に出さずに、話を続ける。
「魔力…、わかるのか？」
「以外かね？」
「いや、このように機械が多くあるとな…」
「なるほど。たしかに、科学と魔術を結びつけるのは難しい。私が魔術を知らないと思ってもおかしくないだろう。」
「では、おまえが私を呼び出した魔術師なのか？」
「私は魔術師などではない。少なくとも、今はな。そして、君を呼び出してなどはいないが、ここにいる原因はおそらく私達にあるの

だろう。
…とりあえず、私が話すのはこれくらいだ。では、先ほどの質問に答えてくれるとうれしいのだが。」
先ほどの質問、私が『何』なのか。
とりあえず今は、話す以外の選択肢はないのだろう。

「私は、英霊だ」

「英霊、とは？」

「英霊とは、簡潔に言えば、生前英雄だった者のことだ。
英雄のなした功績は、神話や伝説となり、それは信仰を生む。
その信仰をもって人間霊である彼らを精霊の領域にまで押し上げたのが、英霊だ。」

「…なるほど。こちらの定義とは多少異なっているな。話を続けてくれ。」

「……ああ。そして、英雄は死後、英霊となり、完全に現世と切り離された、『英霊の座』へと運ばれる。」

「英霊の座？」

「そう、英霊となったものが至る場所だ。」

「なるほど。」

そこで、しばし両者は共に無言となった。

私は、これ以上の情報を、現時点で明かす必要がないと考えて。
アレイスターも、なにかを思考しているようだ。

やがて

「なるほど…、だいたいのことは理解した。
だが、最後に1つ聞かせてもらおう。」

「なんだ？」

「『英霊』だというのならば、君も歴史に名を残す『英雄』なのだろう？
では、君の名は、なんという？」

「…あいにく、私は特殊な英霊でね…。
名なんてものは、ほとんど知られていないのだよ。
だから聞いても、それにあてはまる英雄は存在しないだろうが…。
私の名は、エミヤという。」

「…エミヤか。なるほど。これでこちらからの質問はおわりだ。」

そういってアレイスターは黙った。

「ならば、次は私の番だ。なぜ、私はここにいる？」

「それは、我々の行った実験の結果だ。」

「実験？」

「ＡＩＭ拡散力場を重ね合わせることにより、別の『界』をつくる実験だ。」

ここで、聞きなれない言葉が出てくる。

「ＡＩＭ拡散力場とは？」

「能力者が無自覚には発している微弱な力場のことだ。能力者については、あとで説明しよう。

とにかく、その力場を使って、私は新たな『界』を作ろうとした。結果として、確かに、『界』のようなものはできたが、それは不安定であり、また、稀薄すぎるものであり

私は、実験は失敗と判断し、その『界』の維持を解いた。

だが、想像に反して、『界』は消滅せず、さらに、どこか別の『界』へとつながった。

そして、そこから現れたのが、君だ」

「…なぜ、そこから私が？」

「おそらく、その英霊の座、と呼ばれる処へとつながったんだろう。ちなみに君が出てきた後、『界』は完全に消滅した。」

「…なるほど。」

ずいぶん突拍子のない話だ。

しかし、ほかに信じるあてもない。

「なら次だ。ここ――学園都市といったか――についてと、さきほどの能力者について聞かせてもらおうか。」

「ああ、学園都市とは――――」

そして、アレイスターの話は、私の予想の範疇を大きく超えた話であった。

第3話（前書き）

自分の書いた話を読んでいただけるというのは、嬉しいものですね。
本当にありがとうございます。
第3話です

第3話

学園都市へ至ってから1日が経過した、エミヤは一人、物思いに更けている。

昨日、アレイスターからされた話は、想像を軽く凌駕するものであった。

学園都市、能力開発、風紀委員(ジャッジメント)、警備員(アンチスキル)、樹形図(ツリーダイアグラム)の設計者、超能(レベル5)力者

…

エミヤにとってまさしくそれは驚愕であった。

外との何十年もの技術格差もそうだが、なにより驚いたのは能力者の存在である。

学生のほとんどが能力開発を受けており、さまざまな力をもっている。

学園都市に7人しかいない超能(レベル5)力者に至っては、軍隊を一人で相手にできるとまでいわれているそうだ。

能力によっては、英霊さえも打倒しうる。

その事実は、恐るべきことであった。

「(またなんというか、すごい世界に来てしまったものだ…)」

そう思いつつ、エミヤは自分のこれからを考える。

アレイスターが言うには、エミヤには今後、学園都市で生活してもらうそうだ。

英霊とはいっても、今は完全に受肉しており、生身の人間とほとん

ど変わらない。
よって、学園都市で生活しても問題はないらしい。

しかし、そのかわり、エミヤには、風紀委員のような仕事が課せられた。
内容は
・能力者同士の争いの鎮圧といった、治安維持活動。
・要請があった場合の、風紀委員、並びに警備員の支援。
といったようなものである。

エミヤは、手元にあるカードを見る。
ライセンス（証明書）と呼ばれるそれは、アレイスターに渡されたものだ。
これがあれば、風紀委員や警備員の施設にはいることができ、また、自分の身分の証明にもなるらしい。

そこに書いてある、自身の名前。
『衛宮士郎』。

姓名が必要であり、偽名を特に思いつかなかったエミヤは、不本意ながらかつての自分の名をそのまま使った。
今現在の彼は、紛れもなく、衛宮士郎、なのである。

「はぁー…」
ため息をついた。

さて、彼、英霊エミヤが、衛宮士郎だったころの姿に戻り、また、

再び衛宮士郎という名前を手に入れた。
精神は肉体に引っ張られる。そして、名前というものもまた、その存在に影響を与える。
結果、彼は、根本が英霊エミヤであるということには変わりはないが、やや衛宮士郎というかつての自分に近づいているといえよう。
さしずめ、エミヤでも衛宮士郎でもなく、エミヤシロウといったところか。

そんなエミヤシロウ、以下シロウは、昨日から今日にかけて、ネットや書籍などを活用し、学園都市についての一般知識を身に着けることに励んでいた。
一晩以上勉強をし続けた甲斐もあって、今では、学園都市で生活する上での、必要最低限の知識は身に着けている。

そして、あることに気付いた。
学園都市のトップである、統括理事長アレイスター。
彼についての情報が、まったくといっていいほどなにもないのである。
経歴、年齢、なにもかもが不明であり、どう考えても、情報が隠蔽されている。

アレイスター・クロウリーという名前は、魔術師にとって特別な意味を持つ。
その名は、世界的に知名度の高い魔術師の名前であるのだ。
数々の独自の魔術を生み出し、また、「霊的な叡智」と呼ばれる、天使に近い存在とのコンタクトに成功したとまでいわれる大魔術師。
仮に、この世界にも「魔術」と呼ばれるものが存在し、「魔術師」が存在するのであればおそらく、魔術師としての、アレイスター・クロウリーは、この世界にも実在していたのだろう。

ならば、この学園都市の頂点に君臨しているアレイスター・クロウリーとははたして、どのような関係なのか。

そう疑問に思い、モニター越しに聞いてみたところ

「…さあ、誰のことなのかわからないな。それよりもエミヤ、君の来ていた聖骸布のコートを少し貸してもらいたい。

その対魔力性は、実に興味深い。」

などとはぐらかされた。

魔力、などと口にしていることから、魔術とは無関係でないことはわかるが、それ以上はなにもわからない。

アレイスターの顔を見ると、無表情なのに、どこか笑みを浮かべているような気がした。

その後彼は、空間移動系能力者の手によって、窓のないビル内に送られ、アレイスターと直接話をした。

そして現在、話を終えたシロウは、自身が住むことになった建物に向かって歩いていた。

日は既に西に傾きだしており、夕日が街を、茜色に染めている。

「（それにしても、やはり、この街はすごいな…）」

彼が今いるのは、第7学区。
学園都市のほぼ中央に位置し、学校や学生寮など、主に学生の生活のための設備が集中している学区だ。
今も、学校帰りであろう夏服を着た生徒の姿が多くみられる。
自販機の前でジュースを買い笑い合っている生徒。暑いからか木陰で涼んでいる生徒。建物の隙間でこっそりとたばこを吸っている生徒・・・。
ここまで聞けば、普通の街で、当たり前のようにみられる光景だろう。
しかし、能力の存在が、それを当たり前でなくしている。

自販機の前で話をしている少年の前には、何もないのにふわふわと宙に浮いているジュースの缶が。
木陰で涼んでいる生徒のまわりには、そこにしか吹いていない風が。
たばこを咥える生徒は、自身の指の先から出る小さな炎で火をつけている。

これが学園都市。
超能力の実在する街である。

「（そしてこの発達した科学技術）」

街中を、ドラム缶のような形のした清掃ロボットが動き回っており、ごみを片っ端から回収している。
飲食店の前には、ホログラムの料理見本が。
そして、空に浮かぶモニターのついた飛行船。その画面には、今日の日付と、明日の天気とが書いてある。

シロウは、そこに書いてある文字を読み取る。

「（今日は7月１０日、明日の天気は5時から晴れ、７時から弱雨、あとは夜まで晴れ…か。確率もなにもない。これが天気予報ならぬ、天気予知か…）」

学園都市は、その科学力をもってして、天気予報を確実なものとしている。
これが、もはや天気『予報』でないことから、学生達からは、天気『予知』といわれている。

「（本当におそるべき科学力だな…。）」

そんなことを思いながら足を進める。
そして、視界にクレープを食べている女生徒をとらえたところで、あることに気付いた。

「（飯…どうするか）」

受肉しているとはいえ、彼は英霊である。
数日なにも食べなくても、十分に活動できる存在である。
しかし、それはなにも食事を摂らないというわけではない。
英霊だって眠たくなるし、腹も減るのである。
まあ、それは気持ちしだいでどうにでもなるのだが。

「（ここにきてからまだ何も食べていないしな。晩の食事くらい作るか。）」

そう思いシロウは、近くにあったスーパーマーケットにはいる。
ここでもやはり学園都市はすさまじく、あらゆる国の野菜やら魚やらが並んでいた。

その食品の数が、シロウの料理人魂（？）を刺激するが、いまは我慢する。
軽めに焼きそばでも作ろうと思い、野菜と麺、調味料を買い物かごにいれ、レジへと向かった。

アレイスターにもらったクレジットカードで支払いをする。
アレイスターが言うには、シロウの口座にはあらかじめ生活に困らないレベルの金を入れておき、仕事をこなしたりした場合、その分の報酬が振り込まれるようになっているそうだ。
さらに、いちおう学生扱いであることから、補助金が月1で入るらしい。

支払いを終え、シロウは自身の家へと向かう。

食品の入った袋をぶら下げながらしばらく歩いていくと、やがて、その建物が見えてきた。
3階建てにしては縦に長い、1つの階に2部屋のマンションである。
できたばかりで入居者はまだいないらしく、シロウが初入居者らしい。

とりあえずシロウは、自身に当てられた部屋へと移動する。
2―1号室。それが、シロウの部屋だった。
持っていた鍵で、ドアを開ける。

中は1人で住むには、少しばかり広い部屋だった。
玄関を抜けた先にあるのは、ダイニングキッチン。
そしてその向こうに、寝室がある。
また、ベランダがあり、洗濯物などを干せるようになっている。

洗濯機や水道、冷蔵庫などは元からあるが、他には、白いソファーを除いて何もない。

「これは、明日にでも家具を買いに行かないとな…」

そう呟きつつ、キッチンへ向かう。
火が通っていることを確認し、食材をだす。

そして気づいた。

「しまった…。調理器具がない。」

不覚にも食材ばかりに目がいっていて、調理器具や、食器のことなど考えていなかった。

少し考えて

「仕方がないか。」

自身の魔術を行使する。

「投影開始（トレース・オン）」

魔術回路に撃鉄を下し、想像するは調理器具一式。そして皿。

ここに今、幻想を結ぶ――

すると、シロウの前に、研ぎ澄まされた包丁と、まな板、鍋、そして食器が出現した。

これがエミヤシロウの魔術『投影』。
自身のイメージした物を、魔力で再現する魔術。
本来ならこの魔術によって生み出されたものには、世界の修正力がはたらき、時間がたてば消滅してしまう。
しかし、シロウの行う投影は、とある理由のため例外であり、投影したものが壊れたり、もしくはシロウが自ら破棄しないかぎり、永遠に存在し続ける。

「それにしても…、この世界にきて最初に行う魔術がこれとは…」

自身が投影したものを前に、シロウは、すこしむなしさを感じた。

第４話（前書き）

かなり多くの方に読んでいただけているようで、驚きました。
…いや、本当に驚きましたよ…。
楽しんでいただけているのであれば幸いです。

というわけで第４話です。
全話に比べれば短くなっておりますが、ご了承ください。

第4話

次の日の朝、シロウは第2学区へと来ていた。
第2学区は、風紀委員（ジャッジメント）や、警備員（アンチスキル）の訓練所、そのほか、兵器の試験場などといったものが、集中している地域である。
よって、必然的に騒音が多く発生するために、この学区はまわりを特殊な防音措置の施された壁で囲まれている。
そしてシロウは、この学区内のある訓練所内にいた。

服装は、黒のTシャツにジーンズというラフな格好であり、両手に双剣を持っている。

その剣は、神秘を内に秘めた『宝具』であった。

宝具――
それは、人間の幻想を骨子に作り上げられた『物質化した奇跡』である。
例えるなら、おとぎ話に登場する魔法の財宝。神話に登場する神々の武装。英雄譚に登場する伝説の武器。
それが、宝具である。

そして、シロウの持つ剣の銘は、干将莫邪。
中国の伝承に残る夫婦剣であり、シロウが最も好んで使う武器の一つだ。
この剣は、シロウの投影魔術によって作り出された贋作であり、本物よりもランクは下がっているものの、十分宝具としての力をもっている。

では、なぜシロウが宝具などというものを持ち、このようなとこ

ろにいるのか。
理由は単純明快。アレイスターから、来るように連絡があったからである。
どうやら、シロウの戦闘能力を知るために、学園都市製の戦闘プログラムを受けさせる気らしい。
あまり手の内は見せたくないのだが、英霊としての力をみせろ、そう言われたため、やむ負えずシロウは宝具を投影している。

そして今現在彼は、戦闘の前の精神統一なのか、目を閉じていた。
彼が立っている場所は、施設の中とは思えないほど広く、また、さまざまな障害物が用意されている。
今から彼が行うのは、対軍用戦闘プログラム。
無人のロボットを相手とした、対軍を想定した訓練である。

「では、開始する」

職員の声と同時に、シロウの前方にある扉が開いた。
中から出てくるのは、数多くの無人ロボット。
人型から、空を飛ぶソーサー型まで、さまざまな形のロボットがいる。
それらは皆、なんらかの形で武装をしていた。

戦闘が始まる。

シロウは、閉じていた目を、ゆっくりと開いた。

side　研究者

上からの命令で、戦闘プログラムSを行えと指令があった。
これは、学園都市暗部の戦闘部隊や、超能力者（レベル5）に向けて調整されたプログラムだ。

今までおれが立ち会ったのは、暗部戦闘部隊『迎電部隊（スパークシグナル）』、そして、学園都市第二位の『未元物質』（ダークマター）による戦闘だ。
迎電部隊は、その多くが負傷してはいたもののなんとかクリアー。
第二位は、その能力を使うことで、傷を負わずにクリアーしていた。
まあ、聞いたところによると、第一位『一方通行』（アクセラレーター）は、ほとんど動かず一瞬で終わらせたらしいが。

それで、いったいどんなやつが受けるのかと楽しみにしていたら、どうやら、学園都市外部から来た人間らしい。
年齢は、高校生くらいだろうか。
赤い髪と、妙に鋭い目が特徴的だ。

てか、学園都市外部？
ということは、あいつは能力者じゃないのか？

そう思っていたら、いきなり奴の手に、白と黒の双剣があらわれやがった。
あれは、中華剣か？
どこからだしたんだあの剣。

やはりなんかの能力か？
だとしたら、外部の能力者とはまた珍しい。
だが、あんな武器を出すなんて能力聞いたこともないぞ。

考えられるのは、空間転移系能力の応用か？

ていうか剣っておい。

なんだあいつ。もしかして、一人で剣使って戦うつもりか？

ありえないだろう。

あっちには、チェーンソーつけて空中に浮かんでいる奴から、マシンガンを装備してる奴までそろってんだぞ。

それを、あんな短い剣でどうするっつーんだ。

…

あいつ、死ぬんじゃね？

まあ別にかまわんが。

上層部は何を考えてんだかな。

さて、さっさとはじめちまうか。

side out

そして、残るのは残骸のみ。

数分後、研究者は呆然と目の前のスクリーンを通して、それを見ていた。

そこに映っているのは、訓練室の風景。
さきほどまで機械として動いていたロボットたちは、今はガラクタの山と化しており、その中心には、シロウが悠然と立っていた。

シロウの強さは圧倒的だった。
研究者は、先ほどまで繰り広げられていた戦いを思い出す。

まず、近接武器を持った敵を、持っていた双剣で瞬時に切り捨てる。
切り伏せた敵を盾にしながら、銃弾をかいくぐり、銃を持った敵を倒す。
時には双剣で、また、時には敵が使っていた銃を使いつつ、そのほかの敵を各個撃破していく。
ただその繰り返しで、シロウは敵を殲滅した。

言うのは簡単だが、実際は、驚異的な動体視力、そして人外的な身体能力がないかぎり、不可能な戦い方。

それを、彼、シロウは実際に行っていた。

能力者特有の、能力に頼った圧倒的な力ではない。
軍隊特有の、数、そして戦略による、大群による力でもない。
個人による、己の培った技術、そして経験によってもたらされた、圧倒的勝利。

「あいつ…、いったいなにもんだよ…」

研究者は、そう呟かずにはいられなかった。

第４話（後書き）

補足です。
基本、この作品中では、超能力を表記する場合
『一方通行』（アクセラレータ）というように、『』の中に漢字、
その外の（）の中に読み方という風にしていきたいと思います。

第5話（前書き）

文章を書くのは難しいです…。
なかなかスラスラ書けません。
というわけで第5話です。

第5話

学園都市、第7学区。
シロウは、演習を終え、道を歩いていた。
時刻は昼。
照りつける太陽はちょうど真上に位置し、あたりは最高気温に達している。
そんな中でシロウは、ビルによってできた影の中をゆっくりと歩きながら、先ほどの演習を思い出していた。

機械相手の、戦闘プログラム。
見ている側は余裕で勝利していたように見えたかもしれないが、実際は、割と苦戦していた。
もちろん、自身の魔術をフルに使えば、速攻片づけることはできたが、自分の手札をそんなところでさらすわけにはいかない。
よって、シロウは、干将莫邪のみで戦闘を行った。

学園都市製の無人兵器。
それは、かなりの高性能であり、また、持っている武器も同じく高性能であった。
また、連携もかなりのものであり、聞いた話によると、あらかじめプログラムされたものだけでなく、その場その場で新たな戦略を立てたりもするらしい。
さすがのシロウも無傷とはいかず、数か所だが、かすり傷を負っている。

だがしかし、シロウの圧倒的勝利だったということに変わりはない。
シロウにはかつて、それ以上の能力を持った軍隊や、魔術師たち

と戦ってきた過去がある。
もちろん英霊としての身体能力もあるが、その経験こそが、今回の圧倒的勝利につながったのだ。
「（とはいえ、やはりこの学園都市の発達した科学力は脅威だ…）」
そう思考しつつ、シロウは歩く。
機械相手の、より効果的な戦い方を考えながら。
だが、シロウは気付かない。
シロウは、英霊だ。
英霊とは基本、人間霊が精霊の領域にまで押し上げられたものであり、その存在は既に、他とは一線を画した神秘である。
そして、多大なる神秘は、同じく神秘によって打倒される。
つまり、英霊を打倒できるのは、魔術といった神秘だけであるのだ。
結果、英霊には、神秘を持たない近代兵器は通用しない。
にも関わらず、シロウは、かすり傷とはいえ負傷していた。
この絶対的な矛盾に、シロウは気付かない、否、気付けなかった。
そんなシロウがいま現在目指しているのは、デパートである。
昨日買い忘れた食器や、部屋に置く家具を買うためだ。

「（たしか、このあたりにあったはずだが）」

シロウは立ち止まり、あたりを見渡す。
すると、視界の端に、なにやら人が集まっているのをとらえた。
時折その奥から、爆発音のようなものも聞こえてくる。

「（行ってみるか…）」

シロウが近づいて行ってみると、それはどうやら、能力者同士の喧嘩のようだった。
制服を着た男子生徒2人が口論をしている。
時折、火の玉や、小石がかなりのスピードで飛んだりしていた。

「…やれやれ、仕事か」

アレイスターに言われた仕事の一つである、能力者同士の争いの鎮圧といった、治安維持活動。
まさかこんなにはやく、能力者同士の戦闘に遭遇するとは。

自身の幸運Eランクを思い出し、ため息を吐くシロウである。

とりあえずシロウは、能力者2人のところに近づいていった。

「あ？なんだテメー」

「邪魔すんじゃねーよ」

二人は、自分たちに近づいてきたシロウを睨む。

「とは言われてもな、私も仕事だから仕方がない」

「仕事？じゃあなんだ、おまえ風紀委員（ジャッジメント）かよ」

「そのようなものだ」

風紀委員と聞いててっきり逃げ出すものかと思ったが、その予想に反して、学生は不敵な笑みを浮かべた。

「できるもんならやってみな。おい、とりあえず休戦だ。とりあえずこの風紀委員をどうにかしないとな」

喧嘩してたはずの相手も。

「そうだな、続きはこいつを倒したあとでな！」

というように、まるで漫画の中の主人公とライバルのような会話をしていた。

「（まるで私が悪者のようだな…）」

そんなことをぼんやりとシロウが考えているうちに、生徒の1人が動く。

「これが、俺の能力だぁ！」

そういって掌をかざすと、その中に、メラメラと揺らめく炎が生み出される。

「そしてぇ！俺の能力はこれだぁ！」

もう1人は、自身のポケットからビー玉を数個取り出し、空中に放り投げる。
すると、そのビー玉は下には落ちずに、少年のまわりにふわふわと浮いて空中にとどまった。
発火能力（パイロキネシス）と念動力（サイコキネシス）。
学園都市内でも割とポピュラーな能力である。

発火能力はその名の通り、火を生み出す能力。
念動力は、見えない力で周りのものを動かす能力である。

初めての身近で見た能力に内心感心しながらも、それを表情には出さず、シロウも自身の能力を行使する。

無言のまま生み出すのは、1本の竹刀。
一見普通の竹刀に見えるが、それにはただ一点、通常の竹刀と異なっている点があった。
それは、虎のストラップがついているということである。

妖刀『虎竹刀』。冬木の虎と呼ばれし、ある自重しない女性の愛用の竹刀である。

「はっ！そんな竹刀で俺たちに勝つつもりかよ！」

発火能力者は、炎をつかんだ手を大きく振りかぶる。

「くらえぇ！」

そして思いっきりその炎を投げた。
炎は、あたりの酸素を飲み込み、より大きさを増してシロウのいる

場所に直撃する。

しかし、それを黙って食らうシロウではない。

炎が投げられた時点ですでに、相手の背後に回っている。

慌てて振り返るが、もうおそい。

「寝てろ」

そう言って、虎竹刀を振り下ろす。

竹刀は、聞いている分には気持ちのいい音を響かせ、相手の頭に命中した。

その一撃は、瞬時に相手の意識を刈り取る。

そう。意識を刈り取ったのである。

だがはたして、意識を失うほどの竹刀による打ちを受けて、人はけがをしないのだろうか。

もちろん、普通だったらけがをする。

だがしかし、シロウが握っている竹刀は虎竹刀。

固有スキル（？）「ギャグ補正」を持った妖刀である。

その打ちを受けたものは、吹き飛んだり、気絶したりするものの、これといった外傷を負うことはない。

「さて、次はおまえだ。」

一瞬で仲間（？）がやられたことに焦ったのか、もう一人も能力を行使する。

自分の周りに浮かんでいるビー玉を、銃弾のように撃ち出した。

もちろん銃弾とは比喩であるものの、それらは十分に速い。それをシロウは

「なっ、打ち落としただと！？」

手に持った竹刀ですべて、叩き落とした。

そして、そのまま

「おまえも、寝てろ」

彼も同様、一撃で意識を刈り取られたのであった。

「ふぅ…」

とりあえず、一息ついたシロウ。

まわりの野次馬から拍手が飛ぶ。

と、そこで

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！」

突然シロウの目の前に、小柄のツインテールの少女が現れた。

第5話（後書き）

虎竹刀…

書きたかったんです。

第６話（前書き）

今回は今までに比べれば長いです。話はあまり進んでいませんが。

第６話です。

第6話

シロウは、目の前に突如として出現した少女を見つめる。
制服を着ていることとその容姿から、年齢はだいたい中学生くらいだろうか。
髪はツインテールとなっており、ゆらゆらと左右に揺れている。
「風紀委員（ジャッジメント）ですの！
このあたりで能力者同士の喧嘩が起こっているとの通報があったのですが」
「（ですの…？）ああ、それはもう私が・・」
ずいぶん上品な話し方をするな…、とシロウは内心感心しつつ、事情を説明しようとする。
しかし
「あいにくもう終わってしまったようですが、能力を用いた喧嘩はルール違反ですの。
というわけで、神妙に捕まっていただきます！」
なにやら、少女に勘違いされているようだった。
ふと周りを見ると、野次馬たちが皆消えている。どうやら、巻き込まれるのを恐れて立ち去ったようだ。
事情を説明しようと、シロウが再び口を開いたところで
「ッ――」

突如目の前の少女が消えた。
それと同時に、己の本能によって体が自動で動く。
自身の腕を、右の後頭部のあたりに上げたところで
その腕は、少女の蹴りを受け止めていた。
同時に二人は驚愕する。
「（止められた！？、そんな…、完全に死角だったはずですわ）」
「（動きが全く見えなかった…、速さによる移動ではなく、空間転移か？）」
二人は同時に距離を取った。
そして互いににらみ合う。
「まさか、今のをよけられるとは思いませんでしたの」
「こちらも、まさかいきなり仕掛けられるとは思わなかったな。できれば、話を聞いてもらえるとありがたいのだが」
それを聞いても、少女は口元に笑みを浮かべるだけだ。
「問答無用ですの！」
いきなり、シロウの目の前に転移してくる少女。
繰り出す片腕による突き。
シロウはそれを、冷静に受け止める。
そして、彼女の腕がシロウの腕に触れたその瞬間

気付けば、彼は空中にいた。

「は――！？」

受け身を取る暇もなく、シロウは背中から地面にたたきつけられる。

身体を突き抜ける衝撃。そして、肺の空気が吐き出される。

シロウは、その痛みに耐えつつ、冷静に状況を分析していた。

「（くっ…、なるほど、自分が転移するだけでなく、相手を転移させることもできるのか）」

シロウの思っている通り、少女はシロウを地面から数センチ上の位置に、転移させたのだった。

結果重力に従い、シロウは背中から落ちることとなった。

「さて、そろそろ降参してくれるとありがたいのですけれど」

再びシロウの前に転移した少女はそう言う。

それを無視してシロウは、地面から立ち上がった。

「（人の話を聞かない奴には、お仕置きが必要だな）」

「降参を…、って、降参する気はないみたいですわね…

仕方ありませんわ。もう少し痛い目に――」

と少女が言いかけたところで

突如、シロウが加速した。

「はい！？」

静止状態からの突然の加速。

いきなりすぎる静から動の動きに、少女は一瞬何も反応することができない。

だが、彼女は経験豊富な風紀委員。

すぐ正気に戻り、とっさに自身の体を空中に転移させる。

少女は、空中から地面を見る。

先ほどまで自分がいた場所に、シロウが手を伸ばしているのが見えた。

「（間一髪ですの）」

そう思い、今度はこちらの番だ、と少女は太もものホルダーに手を伸ばす。

演算を開始し、ホルダーに仕込んでいる金属の矢を、直接シロウのいる座標に『飛ばす』。

だがそれは、シロウには届かない。

矢がその座標に出現より前に、シロウは移動していた。

結果シロウは既に、少女の目前にまで迫っている。

「な――、はやすぎですのっ」

少女が悲鳴を上げたときにもう遅く、彼女は、地面に組み伏せられていた。

身体を動かして抵抗するが、抜け出すことはできない。

気が動転していて、能力発動のための演算を組むこともできなかった。

「やれやれ、だから、人の話を聞けと言っているだろう」

そう言ったシロウが彼女に見せたのは、一枚のカードだった。

ｓｉｄｅ　白井黒子

能力者同士の喧嘩が起こっている――、

このような通報を受けて、私は現場へ駆けつけました。

現地へ着くとどうやら、もう喧嘩は終わってしまったご様子。

能力者だろう二人の学生が、気を失って地面に倒れています。

立っているのは一人だけ。

自分よりも年上であろう男性が、手に竹刀を握っております。

その竹刀には、なぜか虎のストラップが。

…かわいいですわね…

それはともかくとして、この男性、おそらく強いですわ。

私にとって、風紀委員という仕事柄、学生の争いを止めるという機会は少なくはありませんの。

その際、相手のほとんどは、無能力者や、低能力者のチンピラですわ。

ですが稀に、例外が存在いたします。

大能力者（レベル4）以上の能力者や、妙に戦い慣れをしている、いわば戦いのプロ。

そういった方々のほとんどは、まず雰囲気が違います。

私の愛しいお姉さまも、普段はとても美しく凛々しく思わず飛びついて頬ずりして【自主規制】したくなる雰囲気をお持ちになっておりますが、

いざ戦闘となりますと、そこは流石の超能力者（レベル5）。鳥肌の立つようなプレッシャーを放ちます。

そして、目の前のこの男性も、そのような方々と同じような雰囲気をしておりますの。

…だから、私は内心焦っていました。

「あいにくもう終わってしまったようですが、能力を用いた喧嘩はルール違反ですの。

というわけで、神妙に捕まっていただきます！」

そういって、私は彼の背後へとテレポートしました。

考えていたことはただ、一撃で行動不能にさせることのみ。

彼の後頭部めがけて、思いっきり足を――

「ッ――」

息をのんだのは、果たしてどちらだったのでしょうか。

完全な死角からの私の蹴りは、彼の腕に防がれていました。

すぐさま距離を取り、動揺を悟られぬように、虚勢の笑みを浮かべます。

「まさか、今のをよけられるとは思いませんでしたの。」

「こちらも、まさかいきなり仕掛けてくるとは思わなかったな。
できれば、話を聞いてもらえるとありがたいのだが。」

こんな街中で平然と荒事を起こす方に、聞く耳はあいにく持ち合わせておりませんの。

「問答無用ですの！」

そう叫び、私は彼の目の前にテレポートします。
繰り出すのは正面突き。
しかしそれは、片腕で防がれてしまう。

でもそれは、計画通りですの！

相手の腕に触れた瞬間、相手を、空中の座標に転移させます。

そして、彼は重力によって、背中から地面にたたきつけられました。

不意打ちといっていいような突然の衝撃。
おそらく彼は、すぐには動けないでしょう。

「さて、そろそろ降参してくれるとありがたいのですけれど。」

そう口には出しましたが、驚くべきことに彼はその場から起き上がろうとしておりますの。

「降参を…、って、降参する気はないみたいですわね…

仕方ありませんわ。もう少し痛い目に――」

若干いらつきを覚えつつ、私は再び能力を使おうと演算を――

その時、目の前の男の姿がぶれた。

一瞬思考が停止する。

何が起きたのかとパニックになる。

しかし、能力を発動させる余裕はかろうじてありました。

だからとっさに、空中へと転移しましたの。

先ほどの自分がいた場所を見ると、彼の腕が、私の頭のあった部分をつかみ取っています。

…本当に危なかったですの。

でも、今度はこちらの番。

ホルダーに仕込んだ金属矢を、能力によって相手座標に直接『飛ばし』ます。

空中を飛ぶ、という過程がないため、初見で回避は難しいはずですの。

でも、男性は驚くべきスピードで既に動いており、矢は何もない地面に刺さりました。

そして男性は目前に迫っています。

「な――、はやすぎですのっ」

そのまま、背中から地面にたたきつけられる、と思ったら、彼は

私を地面にぶつける瞬間衝撃を和らげ、威力を殺してくれました。
そのおかげで、私は少し痛みを感じたものの、大した怪我はしませんでした。
でも、気が動転してうまく演算ができず、組み伏せられた状態から脱出ができません。

そんな状態で、男性の顔が迫ります。

て、ちょっとちょっとっ、何をするつもりですの！？

近い、顔近い！

そんなこんな真昼間から――

彼の手が迫ってきます。
私は反射的に目を閉じて

ピシッ

「痛あっ！？」

デコピンされました。

「やれやれ、だから、人の話を聞けと言っているだろう」

そういって私は、１枚のカードを見せられました。

そこには『ライセンス　衛宮士郎』とだけ書いてあります。

「？　いったい、そのカードがなんだというんです？」

思ったままの疑問を口に出します。
それを聞いた男性は、眉間にしわを寄せて
「これを見せればどうにかなる、と奴は言っていたんだが…、どういうことだ？」
奴…、とは誰のことでしょうか。
そうたずねようとしたとき、あたりに電子音が響きました。
発生源は、私のポケット。
「…私のケータイですの。とってもよろしいでしょうか？」
「ああ」
…こうも断言されてしまうと、自分の今の立場がよくわからなくなりますの。
とりあえず、ゆっくりと携帯を取り出して、耳に当てると
「白井さん！！！！大丈夫ですか！？無事ですか！？」
真っ先に、仲間の叫び声が聞こえました。
彼女の名前は、初春飾利（ういはるかざり）。私と同じ風紀委員の同僚で友達です。
彼女のその叫びに、嗚呼、私のことをこんなに心配してくれていたのか――、と内心感動しました。
なので彼女に無事な声を聞かせてあげようと口を開け―
「白井さんはともかく、相手の男性は怪我してませんよね！！その男性は大丈夫ですか！？」

…わたしのことじゃないのかよ。

内心でツッコミをいれながら、

「大丈夫ですわ。コテンパンにやられたのは、私のほうですから。」

そう返すと

「はぁー、よかったです。白井さんって乱暴だから、もしかしたら怪我させちゃってるかもって思ってたんです。返り討ちにされたって聞いて安心しました」

…初春…。あとで、お仕置きが必要ですわね。

ふふふふふふふふ

「!?　いま、急に悪寒が!?」

「気のせいでしょう?それで、初春、この男性…、衛宮さんでしたっけ。

この方のことを知っているんですの?」

ライセンスとやらに書かれていた、彼の名前を口にします。

すると、初春の雰囲気が変わりましたの。

…こういう時はきちんと公私の区別をつける。これは、初春の良いところですわね。

「白井さん、その衛宮さんという人に代わっていただけますか。」
私は顔をあげ、先ほどから無言でこちらを見ていた彼に、電話を差し出します。
彼は不思議そうな顔をしたものの、黙って電話を取りました。
「衛宮士郎だ。
…ああ。それはたしかに私だ。
…ほう？
だがそうならなぜ、ここにいる彼女は私を？
…連絡不足？。それはその、なんというか…
ああ、なるほど。では私はこれから、
……了解した」

会話を終えたのか、衛宮さんは再び私に携帯を返しました。
携帯を耳に当て、
「もしもし、どうなりましたの？」
「詳しい話は後でするので、とりあえず、彼をここまで連れてきてください」

「１７７支部までですの！？」

どうしてこのような男性を、風紀委員の支部まで連れていかなければならないのか。

そんなことを私が考えていると

「そこで気絶している、最初に喧嘩をしていたとみられる生徒は、そのまま放っておいてください。別の局員が回収に向かいます。

では、白井さん、しっかり連れてきてくださいね！」

そういって、一方的に通話を切られました。

「…はぁー…」

やりきれなくなってため息を吐くと、衛宮さんと目が合いました。

「…」

「…」

「君も、大変そうだな」

「誰の所為ですの…」

なんですのこの状況。

第6話（後書き）

黒子視点がうまく書けない…。
違和感を感じたりしたら、作者の技量不足だと思って見逃してください。
次はもっとうまく書きたいなぁ。

第7話（前書き）

明けましておめでとうございます。

第7話です。

第7話

side　EMIYA

「すいませんでした！」

今現在、先程出会った風紀委員（ジャッジメント）の少女が私に頭を下げている。

理由は

「完全に私の勘違いでしたの！」

先ほどの、自分の間違いに気づいたからだ。

「そうですよ。白井さんも、もう少し人の話を聞かないとだめですよ」

そう言うのは、頭の花飾りが特徴的な風紀委員の少女、初春飾利である。

年齢は、中学生くらいであろうか、まだ幼さの残る顔つきをしており、同じ風紀委員である白井と比べると、ややおとなしそうな雰囲気の持ち主だ。白井が体育会系なら、まちがいなく初春は文化系だろう。

白井が口を開く。

「でも、明らかに怪しかったんですもの…」

ほう、どのあたりが。

「街中で堂々と竹刀を持っていましたし、髪の色珍しいですし、な

により変に目つきが鋭いですし…」

なるほど、こうやってきくと確かに怪しい。

「なのに童顔ですし、竹刀には虎のマスコットついてますし」

……童顔か…

「あれ衛宮さん、どうしたんですか」

「いや、別にたいしたことじゃないから、気にしないでくれ」

そう口では言いつつも、案外精神ダメージはでかい。

なぜ私は、衛宮士郎の外見なんだ…。

存在を消したいほど憎む過去の自分に、外見だけでも戻る。

何度考えても、やり切れない思いで一杯だ。

「それで、結局あなたはなんなんですの？」

白井に話しかけられたのをきっかけに、思考を内から外へ戻す。

「先ほどの能力者同士の喧嘩を衛宮さんが止めてくれたのは分かりましたけど、衛宮さんが何者なのか謎ですし、というか、なぜ初春も彼のことを知っていたんですの？」

彼女がなぜ私が無実であると納得したのか。

その理由は単純で、監視カメラの映像を確認したからだ。

能力者の学生が喧嘩をはじめ、そこに私が介入し、鎮圧するところまで、カメラはしっかりと映像にとらえていた。

それを見た白井は、自分の非を認め謝罪。
そして今に至るというわけだ。
「だが、確かになぜ初春さんは、私のことを知っているんだ？」
そもそも、なぜ私が此処、風紀委員第１７７支部に呼ばれたのかがわからない。
監視カメラの映像を確認するだけなら、わざわざ私を連れてきたりなんかせずに、別の風紀委員に確認してもらうなどすればよい。
そんな中で、わざわざ私を此処に連れてきたのはなぜか。
初春が口を開く。
「興味があったんです。衛宮士郎という男性に」
…
「「は？」」
それは一体…、どういう意味だろうか。
隣を見ると白井も、不思議そうな顔をしている。
「だって衛宮さん、風紀委員や警備員（アンチスキル）の間で話題になってますもん」
「は？」
なぜ。

「二日くらい前に、風紀委員、警備員各支部に通達がきたんです。
学園都市外部の協力機関から、衛宮士郎と言う名前の男性が来ると。

曰く
彼は学園都市外部で開発された能力者であり、相応の戦闘力を保持している。
よってその男性には、治安維持活動を行ってもらう。
ただし、それは義務ではなく、あくまで彼が自主的に行うものであり、こちらから強制することはしない。
例外として、一定ランク以上の危機が発生した際には、彼に応援を要請することが認められる。

だそうです」

「なんですのそれは…」

隣で白井が呆然としているが、それを尻目に初春は話を続ける。

「そして、本人の情報として添付されていたのは、顔写真と、衛宮士郎という名前だけ。
経歴も能力も何もかも不明。
だから、風紀委員や警備員では、衛宮士郎とは何者なのか、が話題の種となっているんです」

なるほど、そのようなことになっていたのか。
内心で納得するが、同時に、意図しないところで名前が広がっていることに、若干の嫌気を感じる。

そうこうしているうちに白井が、なにやらあわてたように口を開

いた。

「な、ならなんで、私は衛宮さんのことを知らないんですの！？」

その質問に対して初春は、白井の方を向く。

白井の顔を見る。

そして、満面の笑みで言った。

「連絡ミスです、私が言うの忘れてました。テヘッ」

「テヘッ、じゃねぇよおおおおおおおお」

うおおおお！と叫びながら、白井が初春にドロップキックを決めようとしたが、それを私が受け止めた。

「っ！？　なんで邪魔するんです！！」

…

たしかにそうだ。なぜ私は、彼女を庇おうとしたのだろう。

…そうか。

この白井黒子という少女は。

私は一つの結論を出した。

「まあまあ、落ち着け白井。連絡ミスなら仕様がないじゃないか。

なあ、初春さん」

「そうですよ白井さん」

「なんでいきなりそんな仲良いのですの！？
ていうかなんで初春には『さん』付けで私は呼び捨て！？」

「ああ、気づかなかった。
すまなかったな白子さん」

「白井ですのぉおおおお！！」

「静かにしてください白井さん。一応ここは学生の模範となるべき風紀委員の支部ですよ」

「そうだぞ白井。もう少し女性らしい振る舞いをだな」

「誰の所為でぇえええ！！」

数分後、地面に突っ伏している白井の姿があった。

「おかしい…、どうして私がここまでいじられていますの…？」

結論。
白井黒子という少女は、弄りがいのある娘だった。
いや、ほんとうに。

「そうそう、衛宮さん、これをどうぞ」

床に突っ伏している白井を放置したまま、初春が私に声をかけた。
手には、小さな箱を持っている。

「これは？」

「携帯電話だそうです。衛宮さんに会ったら渡せと、今朝届きました。

…どうして、ここの支部に届いたんでしょうね」

衛宮さんがここに来るって分かってたんですかね、と冗談半分に言いながら、初春は私に箱を渡す。

…分かっていたんだろう。

おそらく私は、彼の予想通りに動いていたのだ。

統括理事長、アレイスターの思い通りに。

「衛宮さん、どうかしましたか？」

だが、捻くれた私は、誰かに縛られるのは真っ平御免だ。。

よって、いつまでも、掌の上にいると思わないことだ。アレイスター。

「いや、なんでもない。開けてみよう」

箱を開けると、中にはスリムな外見の、黒い携帯電話が入っていた。

「へぇー、最新型ですね。

機能はそれほど多くないですけど、本体がとても丈夫で、トラックに踏まれてもビクともしないらしいですよ」

「なるほど、それはすごいな」

「あと、内部のセキュリティーもすごかったはずですよ。そう簡単には、通話を盗み聞きされるなんてことはありませんね」

「ほう」

案外、いい機種のようだ。

とりあえず携帯の電源をいれる。

使い方はどうやら、私の知る携帯電話とあまり変わらないようだ。

連絡先はまだ1つも入っていない。

「そうだ！ついでに、連絡先交換しましょうよ！！」

初春がそういってくれたので、白井も起こして、二人と電話番号やメールアドレスを交換する。

その後、学園都市についての無駄話をして時間を過ごしていたが、ふと時計を見ると、針は午後の3時を指していた。

昼飯も食べていないし、そろそろ頃合いだろう。

「それじゃあ、私はそろそろ帰ることにするよ」

それを聞き、風紀委員である二人も、はっとしたように時計を見る。

「すいません、こんな長く付きあわせちゃって」

「なに、気にすることはないさ。私もそれなりに楽しかったしな。
っと、できたら、デパートの位置を教えてくれるか？
もともと家具を買いに行くはずだったのだが、能力者の喧嘩に巻き込まれた挙句、どこぞの風紀委員に攻撃を受けたりしたせいで、いまだデパートが見つけられてないんだ」

「ぐっ…、すいませんでしたの」

白井が、苦い顔をしている。

「なら、デパートの位置情報を、携帯に送っておきますね」

初春がなにやらパソコンを操作しながら言う。

「ああ、助かる」

そうして届いたのは、デパートへの地図。

初春に礼をいい、少し白井をからかってから、私は風紀委員第177支部を後にした。

side out

シロウが去り、建物の中に沈黙が訪れる。
白井黒子も、初春飾利も、それぞれ自身の内で何かを思考しているようだ。
そんな中、先に口を開いたのは、白井だった。

「衛宮士郎…、彼は、特殊すぎますわ」

それはその通りであろう。

まず第一に、能力開発の成功している学園都市外部の支援機関など聞いたこともない。

いや、単に秘匿されていると仮定すれば、あり得ない話ではないのかもしれないが。

すると、次に疑問となるのは、彼の在り方だ。

「風紀委員と、警備員の支援？

彼が、それ相応の実力を持っているのはたしかですし、別におかしいことではありませんが、それにしては、支援される側である我々に伝えられるべき情報が少なすぎるでしょう？」

事前に知らされた情報は、顔写真と名前のみ。

それ以外は何もかもが不明。

これは、あきらかにおかしい。

たとえば、学校等の教育機関に、外部から教師として人が派遣されてきたとしよう。

その人物の情報が、分かっているならいい。

よそ者と、内心うっとおしく思う人はいるかもしれないが、しぶしぶ納得して、その人物を受け入れるだろう。

しかしだ。

その人物の情報が何もなかったら。

分かっているのは、その人物の顔と名前だけ。

年齢も、経歴も、学歴も、なにもかも不明な人物が。

突然、自分たちの職場に来たら、信用できるだろうか。

いや、信用以前の問題だ。

警戒するだろう。
疑い、不気味に思うだろう。
そんな人物に、生徒を任せることなどできないであろう。

つまりは、そういうことだ。

別に、白井黒子という人間は、自分がこの学園都市を守っているだなんて高慢な気持ちは持っていない。
しかし、この街を、より住みやすい街に、安心して暮らせる街にしたい。そういう思いは、確かにもっている。
それは、他の風紀委員や、警備員も同じことだろう。

だから、直接会って、悪い人物ではないとわかっても。
衛宮士郎という人間を、警戒せざるを得ない。
疑わずには、いられない。

「でもまあ、こういう怪しいことなんて、日常茶飯事といってしまえばそこまでですし、そんな警戒しなくていいかもしれませんよ」

重苦しい雰囲気を変えようと、初春飾利が口を開く。

「そもそも、ここ、学園都市ですし」

笑みを浮かべて、こう言う。

それを聞いて少し思考した後、白井もまた微笑んだ。

「ええ、そうでしたわね。ここは学園都市。
超能力なんて空想だったはずのものが実在する、科学の街」

そう。ここは学園都市。
ある日突然、想像もしていなかったような商品が開発され店頭に並び。
都市伝説だと思っていたような出来事が、実は能力によって引き起こされていた現実の出来事であったりして。
科学の街であり、オカルトなんて不可思議はあり得ないのと同時に、科学による、怪しく不可思議なことのおこる街。

外部から経歴不明の人間が来たぐらい、なんだというのか。
それに比べれば、まだ都市伝説である、すべての能力を打ち消す能力者、のほうがよっぽど怪しい。
そんなことを、白井黒子は思う。

まあ、白井が知らないだけで、その都市伝説は実在するわけだが。

「それに、衛宮さん、いい人だったじゃないですか」

初春の言葉に、白井も同意する。

「ええ、私をからかったことは許せませんが、たしかに、悪い人ではありませんでしたの」

「でしょ」

二人で笑いあう。
先ほどまでの重苦しい雰囲気は、どこかへいってしまったようだ。

白井と話を続けながら、初春は内心思う。
目の前で笑っている白井の知らない、自分だけが知っていること

を。

巷では守護神（ゴールキーパー）の名で知られる、一流のハッカーである初春だからこそ、調べられたこと。

衛宮士郎の、より詳細な情報。

初春が見つけたそれは、あらかじめ風紀委員にも知らされていた情報に、１項目だけ付け足したもの。

その情報とは、衛宮士郎の能力名だった。

能力名　『投影』

ここまではいい。

別に聞いたことのない能力名だからと言って、固有能力ならば問題ない。

事実、学園都市第一位、第二位といった者たちの能力も、世界に１人しか存在しない固有の能力である。

しかし

「（能力の『レベル』が存在しない）」

学園都市第三位、『超電磁砲』（レールガン）御坂美琴の能力は、明確に言うと『電撃使い（エレクトロマスター）　レベル５』。『超電磁砲』という名は、のちに彼女自身が付け直したものである。

風紀委員である白井黒子の能力は、『空間移動　レベル４』。

そして、初春飾利自身の能力は『定温保存（サーマルハンド）レベル１』である。

このように、学園都市で発現された能力には、例外は存在するも

のの『能力名』と、確実に存在する能力の『強度(レベル)』がつけられる。

にもかかわらず、彼、衛宮士郎のレベルは空欄であった。

レベルが存在しない。
それは、計測不能なほど微弱な能力なのか。
それは、計測不能なほど強力な能力なのか。
それは、計測不能なほど特殊な能力なのか。
いや、そもそも本当に『超能力』なのか。

初春飾利の疑問は、深まるばかりであった。

だが、今はひとまず

「さて初春、先ほどは、よくもおちょくってくれましたわねフフフフ」

この、掌をわっさわっさ動かしながら近づいてくる同僚をなんとかしないといけない初春だった。

第8話（前書き）

どんどん実生活が忙しくなっていく…。

第8話です。

主人公より前にアイツが登場するっていう。

第8話

「くだらねェ」

日が沈みきった学園都市。冷めた目で世界を見ながら、街頭に照らされた道を、一人の少年が歩いている。
コンビニから帰る途中なのか、手にはビニール袋をぶら下げており、中には弁当と数本の缶コーヒーが入っている。
動く足は、その速さを変えることはなく、ただ淡々としていた。

等間隔に並べられた街灯の光が、少年の足元に影を作り出し、その華奢な体つきを地面に投影する。

年齢の割に、細すぎる体。そして、黒い服を着ているからか、その白い髪と紅い瞳が、一際異彩を放っていた。

そんな少年の進行方向にある脇道から、小太りの中年男性が現れた。
酔っているのだろう、顔を上気させ、足元がおぼつかない様子で、大声で何かを叫んでいる。

少年は構わず歩き続けた。
しかし、男性の方は少年に気づいたようだ。
ふらふらとした足取りで、少年の方へ近づいてくる。
それでも少年は、まるで彼に気がついていないかのように、変わらず歩き続けていた。

少年の前方で、男が立ち止まり、なにやらわめき始めた。

口にしているのは、聞いた者を不快にさせる下品な単語であり、少年を馬鹿にした言葉。
だがしかし、男には幸運なことに、少年にはその声が届いていなかった。

少年はそのまま、男の隣を素通りする。
なにも反応されないことに腹を立てた男は、背後から少年に殴りかかった。

だがここで、男にとっての、最大の不幸が訪れる。

仮に、男がそのまま少年の背中を殴っていれば、少年は何事もなく歩き続け、男も、骨折程度の怪我をしただけで済んだだろう。

しかし現実では、男は酔っていたため足取りがおぼつかなく、転びそうになって。
少年の持っていたコンビニの袋に腕を引っかけ、そのまま袋を数メートル先にまで放ってしまった。
ちょうど、少年の能力の及んでいなかったコンビニの袋を。

そのまま袋は、弁当もろとも地面に叩きつけられた。

そこで少年は、はじめて男を認識する。

「あァ？」

瞬間、男は地面にたたきつけられていた。

「なにしてくれてンだてめェ」

地面にたたきつけられた男は何が起こったか分からない様子で、せき込みつつ口をパクパクさせていた。

「あァ、そういや音を反射してたンだったな。
完全忘れてたわ」

そういって少年は、音の反射を解除する。
とたんに周りから様々な音が聞こえてきた。

「貴様ぁ、能力者かぁ！」

地面に倒れた男の声も聞こえてくる。

「学園都市のモルモット風情がぁ！この私にむかってなんてことをおぉ！」

「あン？うるせェ」

そう言って少年は、ゆっくりとした動きで、足で男の膝を踏みつける。
たったそれだけの行動で、

「ぎゃあぁぁぁ！！」

ボキボキと嫌な音を立てながら、男の足の骨という骨が折れた。

「豚風情が、人様の晩飯に何してンだ」

そういって少年は、コンビニの袋を取りに行く。

「あーあ、見ろよこれ、グチャグチャじゃねーか、どうしてくれンんだよ。
缶コーヒーも、容器がへこンじまってるじゃねェか。
これじゃもう飲めねェなァ」」

そう言って、缶コーヒーを開ける。
そしてその中身を、男の顔に垂らし始めた。

「んんんっ！」

缶から落ちてくるにしては強すぎる勢いの液体を顔に受け、呼吸ができなくなる。
反射的に男は目をつむり、それに耐えた。

「（まだか、まだなくならないのか！？）」

男は、はやくその苦痛が去るのを望む。
そして、男が顔に感じていた衝撃がなくなった。
ようやく、缶の中のコーヒーがなくなったのだと安堵する。
しかし

「（おかしい。なぜ、呼吸ができない！？）」

既に顔へ落ちるコーヒーはなくなった。
にもかかわらず、いまだ呼吸ができない。

おそるおそる、男は閉じていた目を開ける。
目に入ってくるコーヒー。その痛みに耐えつつ、濁った視界の中、
男は何が起きているのかを把握した。

「（なんだこれは！？）」

コーヒーが、なぜか地面に落ちずに、膜のように男の顔を覆っている。

いくら顔を動かしても、まったくはがれてくれない。

目の前では、愉快そうにそれを少年が眺めている。

「（やばい…、呼吸が…）」

意識が消えかける。

酔いなんかとっくに醒めてしまった。

必死にもがくが、どうにもならない。

もうだめか、とあきらめかけたところで、

バシャッ、と音を立てて、顔を覆っていたコーヒーが、地面に落ちた。

瞬間、呼吸ができるようになる。

男は必死に、空気を吸い込んだ。

「どうだ？そのコーヒーの味はァ？」

そして少年は、もっていた空のコーヒー缶を、男の顔の上で落とす。

重力に従い、缶は、男の顔面に落下した。

普通だったら、空き缶が当たったとしても、少し痛いくらいですむ。

しかし、少年の手から落ちた缶は、男の鼻を完璧にへし折った。

ただでさえ疲弊していた男は、その新たな痛みによって、完全に気絶する。

その様子を少年はつまらなそうに。

「なンだ、もう終わりかよ」

そう、一人呟いた。

寂しそうな、しかし、どこか安堵したような、だれも聞いていないはずの独白。

しかし、それに答える声があった。

「いや、もう充分、というか、やりすぎだろう」

そういって現れたのは、白髪の少年と同じか、それ以上の年齢の男。

「なンだおまえ？」

その男は、数日前に学園都市へやってきた英霊。

エミヤシロウだった。

これが、白髪の少年――

学園都市に七人しか存在しないレベル５の中でも、その頂点に君臨する超能力者、『一方通行』（アクセラレータ）と、本来いるはずのない、別世界の存在であるエミヤシロウとの、最初の出会いだ

った。

「なンだおまえ？」

白い髪の少年――『一方通行』（アクセラレータ）は、突然現れた人物にそう訊ねた。

一方通行には、この男が自分に近づいてきた意味が分からない。普通の人間だったら、大の大人に大怪我を追わせた自分になど、近づいてこないだろう。

それにこの男は、「やりすぎだろう」と言った。

それはつまり、自分がこの酔っ払いに危害を加えるところを見ていたということだ。

ならばなおさら、彼が自分に話しかけてくることが理解できなかった。

「なに、単なる通りすがりだよ。

なにやら騒がしかったので、気になって来てみただけだ。」

「あン？

ならなんで俺に話しかけてンだよ」

「一応許可をとろうと思ってな。」

「許可ァ？いったいなんの。」

その質問をうけ、男ーシロウは答える。

「救急車を呼ぶ許可だ」

「…」

普通、暴行した側にそれは訊ねないだろう。

何考えてんだこいつ、と内心思いながらも、一方通行吐き捨てるように返事をする。

「勝手にしろ」

それを聞いて、意外そうな顔をしたのはシロウだった。

「なんだァその不思議そうな顔は？」

「いや、だめと言うと思っていたから、意外でな」

それを聞いて、一方通行は、ますますこの相手のことがわからなくなる。

「それはどういう意味だよ」

とりあえずそう訊ねてみると、それに対してシロウは笑みを浮かべてこう言った。

「てっきり、君はこの男を殺すものとばかり思っていたのでね」

『殺す』。その言葉によって、場の空気が一気に重くなる。
それは一方通行から吐き出される、禍々しい殺気によるものだった。

「なんだなんだァ。
殺していいのかよ?、あン?」

そう言って、狂気的な笑みを浮かべる少年。

「せっかくオレが気まぐれで見逃してやろうと思ってたところなのによォ」

だがしかし、彼から発せられる、大抵の人ならば腰が抜けるほどの殺気を受けていてなお、シロウは変わらず佇んでいた。

「できれば、殺すのはやめてほしいのだが」

そうシロウが言った。
そこから感情をよみとることはできない。
ただ淡々と、言葉を口にしていた。

「なんでだァ?なんでテメーがこいつを庇う?」

心底理解できないとでも言うように、腕を広げる一方通行。

「まさか、困っている人を助けたい的な、クソ下らねェヒーローみ

てェな理由じゃねえだろうなァ？」

その言葉を聞いて、今までずっと変わらなかったシロウの表情が、一瞬だけ曇った。

そう、ほんの一瞬だけだ。

嘗て、ひたすらにヒーロー（正義の味方）を目指していた男は、一方通行の言葉に一瞬だが不快感を覚えた。

「別に私としては、そこで倒れている男性がどうなってもかまわないのだかね」

その感情を抑え、シロウは話し始める。

「だが生憎と、仕事の都合上、見逃すわけにはいかなくてな」

「仕事ォ？」

「風紀委員（ジャッジメント）や警備委員（アンチスキル）と同じようなものだ」

それを聞いたとき、一方通行の顔が変わった。

それはどこか得心がいったというような顔だ。

「あァ、そういうことか。」

なんのことか分からないシロウは首を傾げる。

「おまえが、最近来たって言う外部の能力者か」

なぜ知っているのか、そう疑問に思うシロウにかまわず、一方通行は話し続ける。

「聞いたぜェ。あの戦闘プログラムをほぼ体術だけで無傷クリアーだってかァ？
しかもほとんど無傷だったらしいじゃねェか。
研究員の野郎がたまげてやがったぜ」

その言葉に、シロウの疑問が一層強まる。

シロウは、本当に偶然この場に居合わせた。
よって彼は知らない。
彼の前で笑っている少年が誰なのか。

「能力使った二位の野郎でも三分以上かかる戦闘を、体術のみ、さらには無傷っていうのは確かにすげェ。
…まぁ、あんなもん、俺の時は三秒でおわったけどなァ」

その言葉にシロウは驚愕する。。
先日のあれは、英霊であるシロウからすれば、たしかにそれほどの脅威でもない戦闘だったが、それはシロウという存在が規格外だっただけで、普通なら、集団ならともかく、能力など持たない個人ならば、決してクリアーできるものではなかったはずだ。
それを、嘘か真か三秒。

「君はいったい？」

その問いを受け、一方通行は可笑しそうに笑う。

「なんだァ、知らなかったのかよ」

禍々しい声で。

狂気じみた笑みを浮かべ、彼は言う。

「学園都市第一位、一方通行。それが俺だ」

第8話（後書き）

文章量が増えない…。
ほかの作者様たちは、どのくらいの時間で何文字くらい書けるんでしょう？。
参考までに、教えてくれたらうれしいです。

第9話（前書き）

前半…、なぜこうなった…。
指が勝手に文字を打っていた…。

第9話です。

第9話

「なんなんだコイツはァ…！？」

学園都市最強の超能力者が、目の前にあるモノを見て息をのんでいる。

心なしか、体も震えているようだ。

彼の隣では、満足そうな表情で、額の汗を拭っているシロウがいる。

彼らの前にあるモノ。

それは、溶岩のように、真っ赤に煮え立っていた。

「これは…、本当に食えンのかよ！？」

「ああ、歴とした中華料理だ」

机の上に置かれてるのは、豆腐、豚の挽き肉を炒め、唐辛子味噌等で辛く味付けしたもの。

つまりは、麻婆豆腐だった。

ｓｉｄｅ　一方通行（アクセラレータ）

というか、なんでこんなことになってんだ？

１時間ほど前のあの時。

オレが学園都市第一位だってことを言えば、コイツは逃げるなり、

逆に仕掛けてきたりすると思ったんだがな。

「一位！？すごいな、だけど今はひとまず救急車呼ぶぞ」

と、軽くスルーしやがった。

さらには

「ていうかその弁当はもうダメだろう。もしかして夕食ない感じか？なら一緒に食わないか」

的なことを言って、オレを夕食に誘いやがった…。

まぁ、あいつが作るって言う「今まで食べたことのないであろう刺激的な料理」って言葉に釣られて付いて来たオレもオレだが、誘うアイツもアイツだ。

だがしかし、たしかにコイツは刺激的だ。

ハンパなくヤベェ。

なんだぁこの、絶対的な辛さなんてねぇと思ってんだったらまずはそのふざけた常識をぶち壊す的な鬼畜麻婆は…！？

能力で匂いを遮断してるはずなのに、辛さが伝わってくるようだぜ。

…

いつ以来だろうな。

このオレが、ここまでの刺激を与えられたのは。

「イイぜ…、オマエ、最高に面白ェわ」

オレは椅子に腰かけ、置いてあった蓮華を手に取る。
そして、皿から煮えたぎる麻婆豆腐をすくい、口にそれを含んだ。
「…？」
案外刺激が弱い。
見かけ倒しか？
だが、それにしては外見が――――
「ッ！？」
なんだこれは。
油断させた瞬間に、襲ってくる刺激。
これはまずい。
体のあちこちに異常が生じる。
体温の異常な上昇を感じる。
これは本当にやべぇ。
やべぇ。
だがな。
オレは
オレは、一方通行だ！

学園都市の学生１８０万人の頂点に君臨する最強のレベル５！
それが、オレだ！
「そのオレが…、一方通行が！　こんなマーボー程度にやられるワケがねェだろうがァ！！」
逆算しろ。
この刺激を支配しろ。
数式に置き換え、公式に当てはめ、この法則を理解しろ。
計算計算計算計算計算計算計算計算計算計算計算計算計算。
そして
「掴んだぜェ」
オレは、そこに届いた。
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ
というわけで。
机の上には、空の皿。
そしてソファーの上には、満足げな笑みを浮かべる一方通行がいた。
それをシロウは驚愕した表情でみつめる。
「まさか…、食べきるとは」
驚くのは無理はない。

一方通行が完食したこの麻婆豆腐は、彼、エミヤシロウの故郷にあった、ある中華料理店の麻婆を再現したものだ。

かつてシロウは、その料理店に成り行きで弟子入りする機会があり、その際にこの麻婆の作り方を覚えたのだ。

ただしそれは決して、シロウから進んでの弟子入りではなかったということは、彼の名誉のためここに記しておこう。

さて、その麻婆豆腐は、決して不味いとは言えない。

だが、シロウの故郷の住民達は一部を除いて、あまりその店には行かなかった。

行ったとしても、この麻婆を注文しない。

なぜか。

辛いからである。

もう、ひたすら辛い。

口に含むと、舌に数百の針が刺さってるんじゃないかと思うくらい辛い。

今でこそ、シロウもこれを食べることができるが、かつては絶対に無理だった。

つまりこの麻婆は、とてつもなく上級者向けの一品であるということである。

だが、このレベル5は初見でこれを完食した。

それを、どうして驚かずにいられようか。

一方通行は言う。

「『辛さ』を理解しちまえば大したことはねェ。
そもそも料理の旨みというのも、突き詰めちまえば刺激であり、信号だ。
なら、この『辛さ』っていう刺激を逆算しちまって、旨みであると再仮定してしちまえば問題ない。
…なかなかにウマかったぜ」

「（いまいちなにを言ってるかはわからんが）学園都市一位は伊達じゃないということか――！」

若干ずれてはいるものの、能力者のすごさを再認識したシロウだった。

――――――

そして

「…こいつはなかなかだな」

シロウが淹れたコーヒーを飲みながら、一方通行はくつろいでいた。
なぜコーヒーなのか。それは、一方通行が希望したからであり、案外彼はコーヒー好きのようだった。

初対面の人間の家でも、なにも臆することがなく、むしろそこが自分の家であるかのようにふるまう男。それが、一方通行である。

「それにしても、なんもねェ部屋だな」
と、一方通行はいきなりそんなことを言ってきた。
それに対しシロウは
「そんなことはないだろう。生活に必要なものはみなそろっている」
そう答えた。
ここ数日でシロウは、机や椅子、食器、一応テレビなどを購入し、部屋に置いていた。
ようやく、ちゃんとした住まいになったという感じだろう。
だが
「生活に必要なモノしかねえじゃねェか。
娯楽品はテレビくらいかァ？
これが１０代の男の部屋かよ」
事実、シロウの家には、生活に必要最低限のモノしかない。
この家を初めて見て、これが十代の男性の家であると分かる者はほとんどいないだろう。
だが、そう言う一方通行も、
「…まあ、オレも人のことは言えねェけどな」
そうぼそりと呟いた。
事実、一方通行の部屋も必要最低限な物しか置いてなく、そもそ

も彼はそれほど家へ帰りはしない。
家にいる時間よりも、研究所やそれに関連した施設にいる時間の方が長いだろう。
彼にとって家とは帰るべき場所ではなく、ただ寝たり食事をする場、いわば休憩所のようなところでしかないのだ。

そんな一方通行が言う。

「オレも普通じゃねえが、テメェも普通じゃねえみてェだな」

そして、シロウを見た。

シロウも、一方通行を見る。

まるで睨み合うかのように、二人はお互いを見つめた。

そして少しの沈黙の後、

「そろそろ帰るわ。邪魔したな」

視線を外し、一方通行は立ち上がった。
そして玄関のほうへ歩いていく。

その後ろ姿にシロウは

「ああ、またな」

そう声をかけた。

一方通行は止まることなく歩き続け、靴を履き、ドアを開ける。

そして振り向かずに
「二度と会わねェよ」
そう言って、外へ出て行った。

一方通行が出て行った後も、シロウは動かずじっとしていた。
考えるのは、いま出て行った少年のこと。

学園都市第一位、一方通行。

シロウが夜道で初めて彼の姿を見たのは、中年の男性が暴行されている最中であった。
その時シロウは、一方通行に声をかけるのを一瞬ためらった。
多くの戦場を潜り抜けてきた英霊であるシロウが。
その時たしかに、一人の少年に脅威を感じたのだ。

彼から感じたのは、むせるほどの血の気配。
禍々しい狂気。
そして、どこまでも暗い絶望。

彼の抱いている絶望を感じ取った時、シロウはつい彼を夕食に誘ってしまった。
一方通行が、狂気を抱きつつも、どこかさみしそうに見えたから、放っておくことができなかったのだ。

結果、わずかだが彼と話をして確信した。
彼は、何らかの罪を背負って生きている。
それは、無意識であるかもしれない。
けれどたしかに、なにかを後悔して、何かに苦しんでいるのだ。
それはおそらく、エミヤシロウだから分かったのだろう。
彼と同じく、罪を背負い、後悔して、苦しんでいるエミヤシロウという人間だからこそ。
過去に自らが歩んだ、正義の味方になるという夢を貫き続けた自分自身を憎む、エミヤシロウだからこそ。

そして思考は、一方通行という個人から、学園都市という一つのシステムへと移る。

一方通行を、あのような存在にしてしまった、学園都市という街について考える。

「（やはり、この街には『闇』があるのだな）」

そもそも、『能力』という強力な力が、ただ科学の発展、進歩のために使われるというのはありえない。
力とは、武力や暴力というように、周りを傷つけるものでもあるのだ。
それは、この学園都市でも同じことだろう。
事実、レベル5が単体で軍隊と戦えると言われているということが、それを証明している。

能力というものは、生活が便利になる夢のような力であるだけでなく、やはり他者を攻撃するための手段でもあるのだ。

シロウは窓際まで行き、外の景色を見る。

学園都市は学生の街であるため、夜になると開いている店の数も減り、昼に比べればだいぶ静かな街となる。

闇に染まったその街を見ながら、シロウは、その影の中で蠢いている無数の『闇』を想像し、唇を噛み締めた。

そして、その街の中を、一方通行はゆっくりと歩く。

考えるのは、先ほどあった男、衛宮士郎についてだ。

「（アイツは、普通じゃねェな）」

一方通行は思い出す。

自身が夜道でシロウと会話していた時のことを。

「ヒーローねェ」

ヒーロー（正義の味方）。その言葉を口にした時、一瞬だが、たしかにシロウの雰囲気が変わったことを、一方通行は感じ取っていた。

それは、強い負の感情。

「（あいつ、ほんとに何者なンだ？）」

シロウのことを考えていた一方通行は、そのまま先ほどの食事を思い出す。

「（そういや、いつ以来だろうなァ。ああやって、他人と飯を食ったのは）」

学園都市第一位という肩書きは伊達じゃない。

それを聞くだけで、大抵の人は彼を恐れ、嫉妬し、忌避し、そして彼自身も他人を無視した。

多くの者は彼の能力のみを見て、彼を一人の人間と扱う者は少ない。

けれど、あの、衛宮士郎という男は――

「（なにを馬鹿な。オレは最強の超能力者だぞ？　そのオレが、他人と過ごしたことを嬉しいなんて思うはずなんかねェだろが）」

そこまで考えて、彼は思考を放棄した。

一方通行は、いつものように感情を殺し、ただ無慈悲な最強であろうとする。

その奥底にある感情を、さらに奥に閉じ込めて。

第9話（後書き）

エミヤと一方通行。
両者とも、他人に頼らず一人で生きようとした生きるのが下手な人。
これからも、ちょくちょく絡んでいきます。
二人のバトルはまだ先です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7235z/

とある錬鉄の英霊が為す物語

2012年1月8日18時39分発行